校長室だより～燦燦～ №１４１

反転授業

2020.6.25

「反転授業」とは、オンライン教材などを通じて家庭で事前学習し、授業では演習や意見交換といった実践的な学習を行う教育様式である。授業から宿題を繰り返す従来の流れと異なり、生徒たちが、より主体的に学習に取り組むことが期待される。

通常思い浮かべる授業といえば、先生が教壇に立って講義を行うものであろう。そして、復習として宿題を出されるのが一般的である。反転授業は、従来の授業形態をまさに「反転」させたもので、家庭でいわゆる講義型の授業を映像教材を用いて予習の形で受講し、学校の授業の時間では、実践的な演習や学習内容に関わる意見交換などを行うものである。２０００年代にアメリカで始まった試みで、日本でも取り入れられるようになってきている。

新型コロナウイルス感染症拡大の副産物として、インターネット環境やタブレット端末、デジタル教材などの学校におけるＩＣＴ教育環境の整備は、予定よりも早く進む見通しである。大学では、オンライン授業が当たり前のように行われている。高校でも、オンライン講義などが行われるようになってきた。

オンラインでできることは何だろうか。その弱点はどんなことだろうか。集団で学習する学校がやるべきこと、できることは何だろうか。

一斉形態による講義形式であれば、集団である必要性は低い。家庭で一人でもよい。一方、集団による意見交換や学び合い、教え合いなどの協働的な学習となると、オンラインよりは直接人と人とが交流できる学校の教室の方が、その教育的な効果は上がるだろう。

オンラインなどのＩＣＴ機器を使うと、一般的に学習意欲が上がると言われている。ビデオ講義などの映像教材だと、わからなかったポイントを繰り返し確認することができる。完璧に知識を習得するまで何度も繰り返し講義を受けることもできる。自分のペースで進めることができ、復習にも活用できる。

学校の授業では、協働的な学習を通じて、自分の考えをまとめ、議論できる能力を身につけることが期待できる。従来の方法であれば、時間的な制約から十分ではなかった協働的な学習に時間をかけることができる。

従来のような知識のインプットに焦点を当てた授業ではなく、演習やプレゼンテーション、ディスカッションを通した知識のアウトプットに焦点を当てる授業を行うのが反転授業の特徴である。一斉形態による講義形式だと、教師は生徒一人一人の理解度を把握しにくいが、反転授業だと、事前に習得した知識をアウトプットする場となるため、教師は演習等を通して一人一人の理解度を確認しやすくなる。それにより、生徒に合わせたサポートができ、生徒のより深い理解につながる。

反転授業は、アクティブラーニング型授業の一つであり、生徒に必要とされる力を身につけさせるための有効な指導法である。だが、万能なわけではなく課題がある。宿題としている予習を行わなければ反転授業の意味はなくなる。現状では、生徒の家庭におけるＩＣＴ環境整備が万全とは言えない。生徒に貸し出すタブレットもない。予習で使う映像教材の作成には膨大な時間を要する。

今すぐにでも反転授業を始めたくても、まだまだその環境が整ってはいない。しかし、近い将来、環境が整えば、新しい学校の生活様式の一つとして、新しい授業スタイルとしての反転授業が行われるようになる可能性はあると考える。